
召喚士

シアン色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚士

【Nコード】

N9953A

【作者名】

シアン色

【あらすじ】

両親が死んで数ヶ月。水野礼緒は貯金がそこをつきはじめ、危機に陥った。母が最後に残した「大きな木下を掘れ」という言葉を頼りに土を掘ると……。そして、目が覚めるとそこは——異世界でした。

プロローグは丸い生物と共に

森の中。そこに、水野^{みずの} 礼緒^{レオ} はいた。

礼緒の家は何故か近くに街があるのに関わらず森の中にあるのである。礼緒は小さい頃疑問に思い、両親に何度も理由を聞いてみたが、「何となく」の一言だった。今でもやはり疑問に思うが、両親は既に他界しているため真相はわからなかった。

「えーと。多分此所・・・のハズ・・・」

両親が・・・母が死ぬ前に、「家計がやばくなったら家から南の方向に大木があるだろ？その下をほれ。バカ息子よ。」と言い残した——バカ息子はいらなかったと思う——言葉通り、家計はやばくなり、今、大木の前にいるが。

ここまでの道のりは崖やら茨やらで「ココは何処だ！まじで森か？！」と叫んでしまうほど危険だった。

その途中にスコップを崖下に落としてしまい、素手。

・・・手で掘れと？

だが、戻るのも大変だし、戻ってくるのも大変なので、ここは家計のため・・・というか自分の命のために素手で掘ることにした。

「・・・。。うえ。爪に土が・・・。。最悪だ・・・。」

それからずっと掘り続けるが何かが発掘される気配なし。うん。最悪。

ガリガリガリガリ・・・。。

ガリガリガリガリ・・・。。

ガリガリガッ・・・！！

「おっ！！」

掘り始めて多分1時間。ようやく何かの気配が・・・！！
周りの土を手でかき分けるように掘っていく。

「おおおっ！！」

なんとそこには丸い生物が……丸い生物……？

ひょーっ！！

ビクツツ!!!

「うえおあ?!?!」

驚きのあまり礼緒の口から漏れたのは変な声だった。

冗談抜きで変だった。

ひょこっ！っというなんとも軽い音で出てきた丸い物体は突然コ
チラを向く（？）と突然マシンガン——どこから出したのだろうか
——を礼緒に向け・・・発砲！！！！

「ええええええええ？！！！！！！！！それ何処からだしたあああああああ？！！！！！！」

礼緒は思わずツツコミながらも悲鳴をあげ、撃たれ、反動で仰向けに倒れる。

心の中で「ありえねえええええ！！！！」と思いながら礼緒の意識は沈んだ。

礼緒は死んだ。丸い生物はマシンガンの銃口からでるかすかな煙——マジででてんのか？——に向かつて「フッ」と息を吹きかける。そして、この物語は終わった……。

なんて言ったらおもしろくも何ともない。

「召喚士」の「し」の字もでずに終わってはいけない。

なので、礼緒にはもう少しがんばってもらうことにしよう……。

「・・・メシアで・・・。」

一話は大きな肉食動物と共に（前書き）

ようやく一話です。視点がナレーターと礼緒で「こちゃこちゃしてま
す。一応全部礼緒と思って読んでください

一話は大きな肉食動物と共に

「う．．．」

お久しぶりです。水野礼緒です。

ハッキリ、今、めちゃくちゃ困ってます。

「こ．．．ココ何処．．？」

そう、俺が倒れていたのは、廃墟のような所でした。森ではありません。

周りにはまだ煙や火が上がっていて、廃墟になったばかりのような村です。

そして、俺はその広場のような所にいます。

「意味わかんねえ．．．．．森．．が．．ない？」

ついでに言うと、周りには．．

「血．．に．．死体．．？」

そう、まだ新しいと思われる血と、死体．．のようなものがありました。

普通ならココでパニックになりますが、俺にとってパニックは「パニック＝冷静」のような感じで、今、パニックってます。

「ああ．．マジで何処だよココ．．。」

今思えば、母のせいのような気もしてきました。

だって、大木の下を掘ったら丸い生物にマシンガンでうたれて．．撃たれて?!?!

「ああああああああ!?!?!?!?!生きてる!?!?!?!」

いやっほー!!生きてるぜ!?!!「グルルルル．．」生きてるぜ!?!!「グルルルル．．」

生きてる．．．ぜ．．?「グルルル．．．．」

．．．．．何故、巨大な狼のような生物がいるのでしょうか．．．?

「ギヤアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!」

!!!!!!

一話は大きな肉食動物と共に

「まってまってまって――！！！！！！！！！！」

「何ここ何処ココなに?!この状況!!ってゆーか俺こんなにテンション高くなったの初めてだ!!!!!!」お、おおお落ち着けよ俺!!!!!!スースーハー……。ってなんでラマーズ法してんだー!!!!!!」

あああああ！！！！！！落ち着け俺！！！！！！そのパケツぷりに心なしか巨大肉食動物（狼？）は引いていた。

「はーはーはー……。何なんだよ……。この状況は……。」「
ジリジリと引いていた巨大肉食動物（狼？）は近づいてくる。」

今はまだ一匹！OK！！多分逃げられる！！と、心の中で思い反対側に逃げようとする。

ジリジリジリジリ

コンコンコン

ジリジリジリジリ

コソコソコ・ダッ！！！！

礼緒は物凄い勢いで逃げていく。巨大肉食動物（狼？）も追いかけてくる。

「ひいひいひいひい！！！！」

廃墟となつた村を走っていると、いつのまにか巨大肉食動物（狼？）は5匹まで増えていた。

「なあああああんんでええええええええええ？！……！！！」

ありえねえ ええええええええええ！！！！！！！！

叫びながら走っていると、村の中心と思われる場所にきていた。・・
いみねえ・・。

「ハアハアハアハア・・・・。」

ヤバイ。ヤバイぞ！追い詰められた！！

「ま・・まじかよ・・。なんでこんなベタな展開に・・?!」

それはまったくもってどうでもいい。

が、それでもいつてないと追い詰められた恐怖で動けなくなりそう
なのだ。

今も十分動けないが。

「くっ・・くそっ・・。」

ジリジリと巨大肉食動物（狼？）は近づいてくる。

「こ・・ここまでか・・。」

諦めたとわかったのか巨大肉食動物（狼？）はわざとゆっくり近づ
いてくる。

「・・・・。なんていうと思ったか——！！！！！！！！！！」

ダッ！

つと巨大肉食動物（狼？）に向かって走り出す礼緒。

そして、突然の事に反応が遅れた巨大肉食動物（狼？）の一匹の背
中を跳び箱のように飛ぶ。

スチャッ！

つと綺麗に着地し、猛ダッシュ！

そして、

「フハハハハハハ！！！！！！思い知ったか！！」

つとノリでいう。ノリで。

巨大肉食動物（狼？）はその言葉にハッ！となり追いかける。

よっしゃ！逃げれる！！

つと思いつつ必死に走る。
が。

「ドベエツッ！！！！！！」

大きな石——岩なみにでかい——に躓き——というかぶつかり——

こける。

巨大肉食動物（狼？）に追いつかれないように慌ててたとうとする。
「いつ・・・!!」

そう、足首を捻挫してしまったようなのだ。

巨大肉食動物（狼？）はもうすぐそこに・・・。

思わず「なんてベタな？!!」と叫んでしまいそうになるが、今は命の危機。

必死に足を動かそうとするが動かず、疲れと恐怖がどっと押し寄せてきて、意識が朦朧とし始めてきた。

「く・・・そお・・・。」

力が抜けて、膝から前に倒れていく。

ここまでかよ・・・。そう思いながら礼緒は瞼が下がり始める。

巨大肉食動物（狼？）はすぐそばにいる。

瞼が閉じ、意識を失いかけていたそのとき!!

「姉さん!! いたよ!!」

「いくわよっ!!!!」

「うん!!」

二人の男女が現れる。

が、もう意識は闇の中へ。

暗闇の中最後に見えたのは、二人の男女だった・・・。

一話は大きな肉食動物と共に（後書き）

次回「二話は二人の男女と共に」お楽しみに！

二話は二人の男女と共に（前書き）

二人の男女視点。コロコロ変わります。

二話は二人の男女と共に

僕は シン・レインファース

今日は双子の姉の リン・レインファース と共に知り合いのおじさんの村まで来ていた。

だけど、その村は、血と死体と火で、廃墟のような場所になっていた……。

始まりは、数分前に戻る。

おじさんのいる村は、大きな森を向けた所にある村で、いつ魔物ブラッディ が襲ってくるかわからない村で、危険だったけれど、それをのぞけばとてもいいところだった。

リン姉さんと楽しくしゃべりながら森を抜けようとすると、煙の匂いに混じって、血の匂いも漂ってきていた。

僕達は顔を見合わせ、同時に村に走り出した……。
するとそこは、廃墟のような場所だった……。

二話は二人の男女と共に

僕たちは二手に分かれて、生存者を探した。

多分、魔物の炎狼 イード が襲ってきたんだと思う。

炎狼は2mほどの大きな火を吐く狼だ。

一般人にとっては強いが、僕たちのような冒険者には初級中の初級だけど、それは一匹の話。

本当は群れで行動する為、数が一番少ない群れでも40匹はいるので、中々手ごわい。

多分、この村を襲ったのは40匹程度の少ない群れだと思う。

「グルルルル・・・」

突然、民家の影から炎狼が10匹出てきた。

炎狼の口からは人の肉の破片と、血がついていた・・・。

”それ”を見た途端に僕は頭に血が上って、呆然としていた。

そう、その家は、おじさんの家だったのだ・・・。

「そ・・・そんな・・・。おじさん・・・。」

僕が呆然としていると、突然一匹の炎狼が火を吐いてきた。

僕は咄嗟に右にとび、よける。

カシャ・・・

背中に担いでいた大剣をとり、構える。

「よくも・・・よくも村のみんなを・・・つつ！！！」

ダツ！！

僕は炎狼に向かって大きく剣を振り上げた・・・

シンと分かれて少し。

あたし、リンは村を歩いていた。

「・・・。」

村の様子を見る限り、生存者は零だろう。

もしいたとしても、重症で助からないだろうと・・・。

そんなことを考えていながら。

ガッ・・・！！

突然、シンのいった道の方向から何かを叩ききった音が聞こえた。

シンが戦っているのだろう。

とすると、そろそろあたしのところにもくるはずだ。

あたしはその場で足を止め、炎狼が現れるのを待った・・・。

僕は炎狼を倒して、血のついた剣を鞘になおした。

歩いていると、リン姉さんの向かった方向から、

ズドオオオオオン

と、大きな音がした。

多分姉さんも炎狼と出くわし、戦っているのだろう。

姉さんの武器は、華奢な体に似合わない大斧だった。

口より先に手が出る姉さんの性格にはピッタリだけど・・・。

「よ、いしょつと！」

ズドオン！！！！

こいつが、最後の炎狼だった。

あたしはパートナーの大斧、『アン・アックス』通称『アンちゃん』をいつものように片手で持ち、軽々と振り上げ、思いつきり落とす。それだけで、大抵の魔物は死んでしまう。

まあ、仮にも重さ100tは伊達じゃない。

ついでに言くと、『アンちゃん』は本当に生きている。

だから、あたしが持つときは風のように軽くしてくれるのだ。それは俗に言うくマジック・アイテム召喚器具ソウル・ウェポンのく召喚武器だからだ。

召喚武器と書いてソウル・ウェポンと読むのは、武器に魂が入っているため。この大斧の中には、『アンちゃん』が入っている。そう、シンがいつていた。なんでわかったのかは知らないけど。

あたしは勉強はニガテだからココまでしか知らない。どうでもいいんだけどさ。

「リン姉さーん！！！何処ー？」

おっ。シンがよんでる。しょうがない。いつてやろう。

「リン姉さーん！！！何処ー？」

僕は大声でリン姉さんと呼ぶ。

奥で何か声が聞こえたのだ。

「はぁ・・・。リン姉さん何処だろ・・・。」

『ハハッ！！シンも大変だねえ・・・。リン姐さんを姉に持って』

後ろから——正確に言えば背中にある大剣から——話し掛けてきたのは『レン・ラージソード』。僕の＜召喚武器＞だ。

「まあ、でも僕の半身だしね・・・。」

『・・・それよりさ。』

レンは突然マジメな声になる。

「ん？」

『いつになったら、リン姉さんにボクのことを言うの？＜映像＞のボクは紹介されたけど、＜召喚器具＞がしゃべれるとかは一言もいってないよ・・・？』

「・・・。。。」

痛いところを突然突かれてしまった。

リン姉さんには＜召喚武器＞の事はカンタンにしか言っていない。

【＜召喚武器＞は、本当の魂の入った武器なんだ。だから、リン姉さんの武器は姉さんが持つときは軽くしてくれているんだよ・・・名前？ちよつとかして。・・・アン・・・。アン・アックスさんだよ。大事にしてあげてね。】

「・・・＜覚醒＞^{フイック}は、まだ、していないだろう・・・？＜覚醒＞

したら・・・言う・・・。」

＜覚醒＞それは、武器の魂の目覚め。＜召喚武器＞は三段階あつて、

召喚したばかりで効果は【軽い】だけの＜下級召喚武器＞^{エント}、＜覚醒

＜映像＞をだせるようになり、特殊効果もできるようになった＜上級召喚武器＞^{デルタ}、僕の召喚武器は＜上級召喚武器＞に入る。

『・・・。＜覚醒＞・・・か・・・。姐さんには・・・してもらいたく

ないね・・・。』

「・・・。。。」

＜覚醒＞のしかた。それは・・・。

「おい！！！！シーン！！！」

「リン姉さん！！！」

「で、シン。そっちはどうだった？」

あたしは早速シンに聞く。

「・・・おじさんも・・・みんな・・・」

やっぱり・・・。

「そっか・・・こつちも無理だった。」

「じゃあ、後は広場だけだね。」

「そうよ。ってことでいくわよ。」

「うん。」

「!!!」

何か叫び声が聞こえた気がして、僕は走る。

「シン?! どうしたのよ! 待ちなさいよ!・・・待っててっ言っただろうが!」

ブウン!!

「うええ?!」

突然後ろから回転しながら飛んできた大斧のアンちゃんを慌ててよける。

「何するの?!」

「止まんないからに決まってんでしょうが!!! どうしたのよ!」

「声が・・・声が聞こえたんだよ!」

「そう。」

リン姉さんは落ちてあつたアンちゃんを拾いながら追いかけてくる。もうそろそろで広場が見えてくる。

「!!!!」

その声の主と思われる人は、炎狼に囲まれて倒れていた。

「姉さん!!! いたよ!!!」

僕はリン姉さんに言う。

「いくわよっ!!!!」

「うん！」

そして僕たちは、少年を助ける為に、炎狼に向かっていった・・。

二話は二人の男女と共に（後書き）

次回「三話は男女と炎狼と共に」お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9953a/>

召喚士

2010年10月9日00時03分発行